

念
仏
三
昧

「光明主義の念仏安心は一心に念仏すれば如来の光明を蒙りて
摂化せらる 即ち卵の孵化する如くに吾人の心霊が靈活す 即
ち信心が生れ来る 如来慈悲の光明は念仏する処に加はり如来
の憶念衆生と衆生の仏を念ずる暖かなる所に心霊が孵化す」

「念仏三昧とは衆生の一心と如来心との合一的其の両方の間に
寸隙もゆるさざるなり 念仏三昧の能く純熟する人の心は明鏡
の如し」

念 仏 三 昧

世の同胞衆よ、念仏三昧の行は三世の諸仏も悉く斯妙行に依て正覺を成じなされたほどの最とも尊き行法であります。此尊とき妙行を修する時の神の置所を能く心得て御勤めなされるやうに御勧め申します。何事でも其妙所に達せんとするには先づ神の方が肝心であります。真に神の投込ざる念仏では心靈に活くことが出来ませぬ。然らば何にせば念仏に神を入れる事が出来るであらうと御問なされるのでせう。今愚納は念仏三昧の神の入方に就て話さうと思ふのであります。

南無と云ふことは自己の全心全幅を阿弥陀仏に投帰没入してしまふことであります。然らばどう云ふ風に投込んでしまふのであらう。阿弥陀仏の在ます所さへ何の方に在ますかは確と分りもせぬものを、その如来の中にいかにして自己の神を投込ませうと思ふでせうが、成程初めは如来は何処に在ますかは確と分らぬ如来の中に投込めや

うは無ないと思おもふのは何人なんびとも然しか思おもふのでありませう。けれども如来にょらいは絶対ぜつたて的に尊たふとく
 在まして何いづれの処ところにも在いまさざることなき靈れい體たいなれば、唯たゞ無む上じやうの尊そん敬けい心しんを以もつてアナタは
 今いま現げんに真まつ正しやう面めんに在ますものと信しんじて靈み名なを呼よび奉たてまつれば大おほミオヤの大だい慈じ悲ひの靈み胸むねに響ひびき
 て慈じ悲ひの眸まなを注なぎて我われを見みそなはし給たまふと思おもひたまへ。また大だい悲ひのミオヤをお慕したひ申まを
 して一しん心に念ねんじ奉たてまつるべきものであります。夫それでも初はじめはいかに聖み名なを呼よびて念ねんじ奉たてまつる
 も其その心こころの向むかふは唯たゞ真まつ闇くらにて如にょ来らいの实じつ在ざいすとも思おもはれぬ程ほどなれども、开そは自じ己この業ごつ障しやうが
 深じん重ちゆうなるが故ゆゑに業さ障はりの為ために心た神ましが闇くらいから心こころの向むかふ所ところが闇くらいのであります。けれども
 只ただ一しん心に念ねんじ奉たてまつして慈じ悲ひの御み名なを称となへて至し心しん不ふ断だんなる時ときは漸ぜん々ぜんに如にょ来らいの慈じ光くわうに育はぐまれて
 心た神ましが発はつ達たつする故ゆゑに神たまましひの入いれ方かたが自おのづと分わかつて来くる程ほどに真まじめに修しゆしなされませ。聖み
 名なを称となする時ときの神こころの投なげ込こみ方かたを法はふ然ぜん上じやう人にんは道みち詠うたにてお洩もらなされた。あみだ仏ぶつと心こころを
 西にしにうつせみのもぬけ果はたる声こゑぞ涼すずしき。』と是これがあみだ仏ぶつと心こころを弥み陀だの光くわう明みやう中ちゆうに投なげ
 込こみたるしやうにて、骸からは蟬せみのもぬけ殻がらのやうに知しらずく無む我が無む想さうと為なる。さうな

れば身は娑婆に在りながら神は弥陀の中に逍遙するやうになるのであります。

夫でも又思ひなさるのでせう。生れて以来まだ一度も瞻んだ事の無い如来をどうして想はれませうと。けれども確と見えねども如来は実在に在りますものであるから只仏陀の教を信じて現に在ますことを信じて念仏し給へ。一心に念ずる真正面に在ます如来はあなたの念ずる心を一々に受なされて在ます事があなたの心に響いて来る程に。然しながら口に阿弥陀仏と云ながら心は自己の胸中に在りて種々の雑念や様々の妄想に駆られて神が其中に紛らされてしまふて、口ばかりは御名であるが神は如来と一つに為ておられぬと、夫では真の念仏三昧でありませぬ。念仏三昧の心は正に如来の光明中に風の任々風の如くに飛び騰るべきであります。

斯様な話がある。英国のロンドンに或会社社員の中に紛擾が起した時に或名士の信仰談にて衆多の社員の紛擾が解けたとのことである。其大意は凭である。天に在ます神は肉眼では見へぬ其眼に視えぬ神の実に在ますや否やをいかにして分るかと諸君は疑ふ

のでありませう。然し眼に視えぬ神なれども至誠心に祈る時は其心が確りと神様に貫徹して神の聖意に触る故に其が祈る人の心に確りと神の御答が感じられます。至誠心なき祈は神様の聖旨に貫徹せぬ故に響がありません。今喩を以て語らば諸君の御存知の如く此ロンドン是非常な濃厚な瓦斯気が折々かゝるのと夫にまた煙突の煙の甚しいので少しも天が見えませぬ。夫にも拘らず季節になれば風を揚て楽しんで居るものが沢山ありませう。煙や瓦斯の氣の為に風は見えぬけれども今日は風が能く揚つたと云て悦んでをるではありませんか。風が騰つたか落ちたか見えぬのに何にして善く騰つてをることが判ると尋ねるならば答へて云のでせう。君よ、風は見えぬども善く騰つた時は其緒に確かと答がある。若し風が墜落して了へば緒に答がない。との譬にて至誠の祈は神に徹通じて神の容るゝ処となるとの理を説て衆人の紛擾を説いたとのことであります。今念仏心も夫れと同じく至誠心の念仏は一心に神の風が高く弥陀の中に騰るので称名の風の任にくみ空高く騰る。大念は大仏に小念は小仏に一心の全部を

悉く弥陀の中に没入して、風緒の在らん限りを尽して能く騰る時は胸の笊の中に残るべき余緒がない。一心不乱に弥陀に没頭して了つた時の心の緒は夫を曳て見ても堅く一杯に昇つてをる。諸彦よ、一心に念仏する時神の緒の有らん限りを弥陀の中に投入して了へば我胸中は妄想雑念の緒がなくなつて自分はもぬけ殻と為て、神はみ空高く弥陀の中に騰つて居ります。其時は無我の状態となります。念仏三昧のナムアミダ仏の風に随つて神の風が力一杯に騰つた心の状態を聖善導は「神を騰て踴躍して西方に入る」と讃してあります如くに、三昧中に歓喜踴躍して神は浄土に逍遙する相となるのであります。

全く能く念仏三昧を修した方ならば其時の神の在る処が能く判ります。業障の瓦斯や煩惱障の煙にて自己の神が弥陀の中に合致した事は視えねども深く三昧に入て神が弥陀に合したる時は胸に何とも言はれぬ靈感の答がある。若し神の風が弥陀の中に騰らずして地に落ちたならば折角の念仏中に只娑婆の雑念の為に紛はされて貴重な時間

と精力せいりよくとを空むなしく費つひやしてしまふのは実に遺憾じつにゐかんな次第しだいではありませぬか。神こころの凧たこが能く騰あがらず胸むねの策さるの中に緒いとの残りある故ゆえに種々しゆくくの心緒こころが現あらはれて種々さまくの妄想まうごう雑念ざつねんと為るのであります。心こころの在あらん限り一杯ばいに酔あひて心こころの緒いとが残りあらずば妄想まうごう雑念ざつねんは自おのづから薄うすらいで来る。而しかして神こころの眼めも漸々ぜんくに開ひらけて広ひろい々く大光明だいくわうみやう中即ちゆうすなはち如来にょらいの中なかに在あやうになります。

諸君みなさんよ、念仏ねんぶつする時ときは神こころを一直線ちよくせんに高たかく々くみ天そらさやかなる弥陀みだの中なかに投なげ込んでしまふことを能よく修習しゆじふし給たまへ。称名しょうみやうの風かぜに神こころの凧たこは歡喜くわんき踴躍ゆうやくしながら飛とび騰あがりて弥陀みだの中なかに入い神しんしてしまふ時ときは心こころの策さるの中に心緒しんぢよを残のこさず妄念まうねんの跡あとを払はらつて三昧まいに入いる時ときは身みはこゝに在ありながら神こころは浄土じやうどの人ひととなるのであります。

いや高たかく心こころの凧たこはあがるなり御名みなよぶ声こゑの風かぜのまに々く
月つきを見て月つきに心こころのすむときは月つきこそおのが姿すがたなるらん

三昧に入

三昧と云ふは梵語にて等持定と訳す。仏法に無量の三昧あり。念仏三昧法華三昧華嚴三昧等何れの三昧にても三昧に入るには自己の精神全体を仏の中に没頭して余念なきに至れば我を忘れて其と己と一体と成つてしまふこと何事にてもそこに到らざれば妙を得ることは出来ぬ。それには精神が散乱して居つてはゆかぬ。是非統一せねばならぬ。禪宗にて坐禪を修するも先づ初めに精神の統一することを練習する故に能く禪を修めたる人は何事を為すにも其の方に全心を投じて余念なく事業を為す故に其仕事が完全に出来る。故にこの三昧即ち精神の統一はよく習ふべきことである。其れには必ず真面目でなくてはならぬ。三昧に入らざれば其の作す事が完全にならぬばかりでなく其業を為すに興味を感じぬ。三昧に入れば自己の精神が其中に没頭して余念なき

が故に其れに深く入る時は深く妙趣を感じられる。卑近の例なれども劇を好む人が其の劇場に臨むや其舞台に演じて居る其狂言の中に精神が没頭して我を忘れて居る所に其の内心に深く興を感じて居る。其の如くに何事にもさうである。

今念仏三昧を修するも全心全幅を如来の大慈光の中に投じて心々相統して一へに念を投じ全く我を投入し、古人の、月や我我や月やと分かぬまで心にすめる秋の夜の月といふ一心に物の中に我を投げ込んでしまつて全く無我の状態となりたる所に妙趣を感じせらる。念仏三昧のみでなく朝夕の礼拝に如来を讃唱するにも讚の中に我を投じて其に神が入る所に妙趣にいたる。

たとへば如来歡喜の光明に我らが悩みも安らぎて禅悦法喜微妙なる快樂きはなく感ずなり、と讃唱する時に唱ふる声に心が誘はれて識らずに其靈境に入ることを得。其靈境に入る時は言ふに言はれぬ妙趣を感じらる。何事にも事を為すには深く興味を感じずるに到らざれば其中に生命を見出すことは出来ぬ。其実境に触れて生命と為

らざればまた三昧と言ふに足らず。

念仏三昧また讚稱三昧何れも自己の精神が全く其弥陀の実境に触れざれば活ける念
仏にあらざ。また一心に讚頌を唱へて、甚深難思の光明を至心不斷に念ずれば、と頌
ふ時に我心も此中に没頭して称ふる声に導かれて自然に弥陀の光明中に融け込んで
しまふ。こゝに到りて弥陀の靈境の中に眞の我と生れ我弥陀の靈に活くるに到る。こ
ゝにいたりて宇宙に周遍する弥陀の大靈と我が心靈との融合する所に我も活き弥陀の
実在も此処に顕現す。こゝを三昧の境と名づく。

何人も心靈具有せざる者はない。只至誠深心を以て三昧を修すれば必ず妙処に達す
ること疑なし。

三昧の練修

すべて何事にも其業を完成し妙所に詣らんと欲せば至誠熱心に精練を要す。いか

に立派な天資の良材たりとも之を完全に發揮すべく精練するにあらざれば其資性を完成することは出来ぬ。喩へば鉱物中の最貴重なる金剛石と云へども充分に琢磨するにあらざれば本性の光輝を發することが出来ぬ。人は各自本能に於て弥陀の日光を反映すべき心靈の寶石を具して居る。弥陀の靈光に融合ふてそが靈に活き靈の妙味を感じ身は娑婆に在りながら極樂の至美至妙の快樂を感じ得らるゝ性を有つて居る。人々極樂に生れて浄土の快樂無比なるを感じ得らるゝ性を有つて居る。故に極樂に生るゝことが得らるゝならん。然らば必ずしも此身の命終らずとも、心神の弥陀の中に没頭すべき念仏三昧を精修する時は必ず現身にて弥陀三昧の至美至妙の快樂を感じ得らるゝ何ぞ疑はん。只須らく必ず一心に勇猛精進に練習すべきである。たとへ科学やまた技芸等にても一心に鍛練して止まざれば必ず熟達することを得。殊に自己の靈性を發揮して大ミオヤの無上至靈の光明を獲得すべき修行のために何ぞ一心を獻ぐるを惜まんや。此一心の修行に依つて人は従来の非靈なる我より至靈の我に復活す。此人生の

一大事である。若し心靈復活して弥陀の光明中に永遠に活きる目的なからば人生何の価値かあらん。吾同胞衆に三昧の修行を勧むる所以である。

自己の人格を無視する勿れ

君は今現に人間に生れて居ると云ふことは確かに信じて居るならん。抑人間に身を受けたのが宗教の必要なる所以なのでまた宗教に依つて能く練習すれば心靈の光明發得できる可能性を有つて此世に生れたのである。君何故に自己の人格を無視して迎も我々は光明發得できぬと自棄する。若しか是が發得の可能性が具して居らねば人間に生れ来るべき筈はない。君は米を食ふはそれを消化して一分は同化して其血肉と爲し一分は異化して大小便にして排泄して居るではないか。其肉体が其れだけの働きも有つて居る如くに君が心靈に靈の糧を与へ小兒の哺乳して漸々に養育する如くに靈を養育せよ。必ず君が靈に活きる人となりて人生を真に意義ある価値ある永遠の光明を

得たる人と為りて光明の生活に入るべきこと何ぞ疑はん。君聞き給へ。何人も人と生れたるからは大ミオヤの光明に靈に活くべき可能性を有する故一方にミオヤの實在を信じ一方には自己の一心の信仰に依つて靈に活きる可能性を有するを信じて教の如くに一心に念仏三昧を修せば必ず成ずること疑なし。

但し靈の生活に復活せんに三の障害物あり。此が為めに大概は靈に活きるの資格を阻害せらる。其三の障害物は何ぞや。經に傲慢と弊と懈怠とは此法を信じ難しと。此三は何れも靈に活きるの障である。傲慢なるものは自ら従来の動物生活を以て自ら得々然として従来の卑賤なる動物我なるを自覚せず故に自ら謙遜卑下して真に高尚なる靈に活きんとの意志発らず。經に彼らは尊貴自大にして自ら横に道ありと謂ふていかんとも降伏し難しといふてある。実に斯の如きの族は已に形は人間たりとも其意志が修羅道に墮していかんとも度し難き徒である。弊とは六弊とて、すべて神靈の即ち菩薩の麗はしき靈に活きんと欲する高尚なる遠大なる意志の欠けたる人を言ふ。換へ

て言へば靈的人格要素の資格の欠けたる人、弊とはヤブレたる即ち心の宗教心の器のカタワ者、不具者、心の眼耳無しの不具者のことである。世に宗教心の不具者の多いのは、一は是まで宗教が萎れて居たために遺伝素質としても只肉欲の動物的肉欲の方面のみ発達した遺伝にて靈的方面に乏しかりし為に弊族が多いのとおもふ。実に靈的素質の欠乏せる人間も度し難い。また三には懈怠である。心靈の精練は金剛石の琢磨である。なま易い事ではない。従来肉の我は死して靈に復活するのである。全生命を献げて弥陀に投婦没入して妄想我の皮殻から脱してミオヤの子たる靈性がミオヤの慈悲の光明に触れて始めて復活するのである。

懈怠の族は靈に活くる資格のない輩である。世に懈怠にして靈に活くる事のできぬもの程憫れなものはない。

起行の用心

念仏三昧——起行の用心は爰に在り。三昧とは等持定と云ふ。口に聖名を称へ、意を專注して弥陀を念じ、漸々に余の雑念を薄らぐ。念ずる所の弥陀に神を投じ、弥陀が我れか我れが弥陀かと、離れぬ精神状態に入りて、完き調和の成りし処を即ち三昧と云ふ。三昧を又直調とも訳す、直調とは対象とする弥陀の靈中に直覺的に集注して完く能く調和し合一したる処なり。思ふに人は意馬心猿の如く、常に騒がしくして暫くも止まらず、然れども只一心に口称三昧に入りて意を用ふる時は、自づと直調となるなり。要する処は一心にあり。

三昧入神

三昧を行ずるには第一に入神を大切にすべし。入神とは自己の識神を弥陀の靈中に

とう
投ずるなり。真まことに自我じがを如来にょらいの靈中れいちゆうに入るゝ時は、余念よねん全く亡なじて恰あたも蟬せみの脱殻ぬけがらの如ごとく、而しかして識神しきしんは弥陀みだの靈中れいちゆうに清きよき声こゑを揚あぐるなり。我われ弥陀みだに入るが故ゆゑに弥陀みだわ我われに在あり。月つきや我われ我われや月つきやと分わかぬまでに、如来にょらいに合神がふしんするを云いふなり。

世よの技術ぎじゆつなどに於おいても、全まったく其妙そのめうを得えんとせば其業そのげふに入神にふしんするにあり。王義わうぎ之しが書しよ中ちゆうに神たましいを入れ、吳道子ごだうしが画ゑに魂たましひを投入とうにふせし如ごとく、何なんの道みちに於おいても魂たましひを業中げふちゆうに入いれざれば其妙そのめうを得うること能あたはず。吳道玄ごだうげんが馬うまを画ゑかんとして一室しつに閉籠とちこもり、冥想めいさうに馬うまを画ゑけるを門人もんじんが隙間すきまより窺うかがふに、道玄だうげんの身みは見みえずして唯白馬たぐはくばのみ観みえしと。他日たじつ又また觀音くわんのんを画ゑかんとして冥想めいさうに入り、觀音くわんのんを意こゝろに画ゑけば、門人もんじん窺うかがふに人ひとを見みずして唯觀たぐくわん音のんの影かげのみを見みると。之こゝれ所謂いはゆるにふしん入神にふしんの状態じやうたいなり。卑近ひきんな例れいなれ共ども、好角家すまふすきが相撲すまふを見みる時とき矢張り自己じこの力ちからを其中そのなかに投入とうにふして見るが如ごとく。宗祖しゆそが一夜やがつ仏間ぶつまに在ありて口称くちゆう三昧まいを行ぎやうじ給たまへるに、弟子等でしらが其音聲そのおんせいを聞きいて、あまり朗ほがらかに澄すみて、いみじく尊たかとく感かんじて其隙そのすきより窺うかがふに、御身おんみの辺ほとり夕陽ゆうひの如ごとくに輝かき居あたりと。又また或時あるときは大身だいしんの如来にょらい

現前せしことを、門人らが拜み奉りけるとかや。其時には三昧の識神が仏と為りしや
 仏が其人の心となりしや、この一体不二が即ち三昧なり。これを入神の境と云ふ。

三昧の思惟と正受

此事は觀經の「我に思惟を教へ給へ我に正受を教へ給へ」と韋提希が世尊に請ひし
 語なり。此は淨土の莊嚴を觀るに就ての方法なり。導師は此を釈して、思惟とは弥陀
 の仏身淨土の莊嚴を觀する順序として、初めには法眼未だ開けざれば、先づ教を受け
 て其仏の相好等を想像に浮べる辺を云ひ、正受とは自己の靈性が發達し三昧も成熟せ
 し故、法眼が開けて直覺的に靈像が顯現する、了々たる辺を云ふものにして、之れ凡
 夫の想像の及ばざる処なり。喩へば初には障子を隔て、皎月の有る方を想見するが思
 惟にて、弥々障子を開きて正しく月を眺むるのが正受なり。正受と云ふは正しく弥陀
 の相好淨土の莊嚴を觀見し、法眼の開けたる処なり。法眼を開かん為には識神が弥陀

の靈中に投入せざるべからず。茲を導師は、「此三昧を得んと欲せば聾盲瘖癡癡人の如くに成て、弥陀の靈中に識神を投ぜよ、然らざれば心識騒がしくして定意散乱し、容易に法眼開くこと能はず、法眼開けざれば浄土を見ること能はず」と。

三昧入神の七覚支

念仏三昧の思惟を階級として正受に入る。其心行の順序を説明するものは七覚支なり七覚支とは、一択法覚支、二精進、三喜、四輕安、五定、六捨、七念是なり。是の七覚支は植物が成長して枝葉繁り遂に花が開くに例へん。之れ念仏三昧の心靈の開く状態なり。

初に択法覚支とは弥陀に入神の着眼点なり。正に正鶴を認定する。択は簡択とて、已に前方便の素養あるを云ふ。喩へば太陽と云へば太陽が心に浮ぶ如くに弥陀仏と言へば弥陀が思想に現はるゝ如し。然る時は夫が正鶴を択びて心々連続して神を其中

に入るゝなり。動ずれば雜想妄念群り出で、正境を乱さんとす。意思を凝して正鶴に向はしむ。扱法は是れ神を統一するの法にして、或は仏の白毫に意を注ぎ、或は総相を想ふもよし、また専ら名号に專注し、口稱を以て心を統一するもよし、要は一心統一して、弥陀の靈中に神を入るゝにあり。

二に精進覺支とは、正鶴に向て心々相統するに勇猛精進に身を責め、己を摧きて靈性を發揮す。縱令弥陀の日光は照せども、金剛石も未だ研かざれば日光を反映するの性徳顯はれざる如し。肉性を責め理性を碎きて靈性を發揮すべし。導師は一切の毛孔より汗を流し、眼より血を出し給ひしと。宗祖は極寒にも熱汗を流し給ふと。先聖已に然り、後凡何ぞ傲はざらん。

三に喜覺支とは、一心に念仏する窓には弥陀の靈光射し来る。春風徐に吹きて和氣霏々と流る。三昧の兆候靈性に現ず。心益々微に入り心氣弥々朗かに、未だ旭日を見るに至らざるも東天已に暉瞳をなす。此の時の歡喜天地に充つ。是れ喜覺支なり。

四に輕安覺支とは、神が確かに如来の靈中に入りて定中の喜を覺ゆるに至れば、已に神が如来に乗り得たるなり。如来に乗りえたる意は無我なり。無我無意識に為れば心意を煩はす物なし。身心共に輕安を覺へて即ち我が有を感じず。

五に定覺支とは、心が漸々微に入り妙が加はり、弥々心靈の日光が頭はれ来る。金剛石に日光が加はれば、石は日光を我物として光を發射するが如し。月は天に在り乍ら我眼裡に在り、我が眼に在り乍ら月天にあり。如来が我れとなりしや我れが如来と成りしや。徳本行者が、徳本が仏に成ることは難い弥陀が徳本となるのは即今南無阿彌陀仏の当念なり。三昧入神の妙味こゝに在り。三昧入神生仏冥合、この心靈の花開く時、弥陀の靈応正しく我靈性と合体す。春日麗かなるは色美しく香馥ばしき時、雄藥の花粉は雌藥に入る。是が此れ聖胎と為り、眞の仏子と為るの妙機なり。

六に捨覺支とは、捨とは任運無作とて念仏三昧の意思の用心が、初めに注意を怠るといつの間にか心と仏と離別すれども、漸々純熟するに随つて竟には注意を要せずと

も自ら三昧を成ずるなり。例へば射を習ふにも、初めには余程注意せざれば矢ゴロを失へども、能く稽古を積む時は自からの中するに至る。三昧も熟すれば自然と仏心と相応して離るゝことなし。

七に念覺支とは、念とは一人一日の中に八億の念あり。已に仏子の核となりし上よりは、寤寐に念々に其核が中心と為りて、恰も果実が漸々に長養するが如し。是れ即ち各自の人格を形成する元素なり。若し悪人にして地獄の性格と為る者の核は、枳の如き果を成熟する為に、日々悪業増上の働きを積で地獄の種子を造り、夫が熟すれば身は人間に在り乍ら已に地獄の業識が熟するなり。若し念仏三昧を以て業事成弁する時は、身は此土に在り乍ら既に弥陀の種子を其人の心霊に成熟するを以ての故に菩薩聖衆と云はれ、其中心より起る三業の所作は悉く仏子仏心仏行となるなり。

三昧発得の証明

あみだぶと申すばかりをつとめにて浄土の莊嚴見るぞうれしき

三昧発得は冷暖自知にて自己の実験なり。然れども如何なる分齊より発得せらるゝやに就ては又証明を要す。

群疑論に録する所によれば、三昧を得ることは何を以て知ることを得る、頗る聖教有て能く証知することを得るや。釈して曰く、「但當さに憶想して心眼をもて見せしむ。此事を見る者は即ち十方一切諸仏を見るを以ての故に念仏三昧と名づく」と、此を以て証とすべし。行者平生に種々に修道すと雖も、三昧を得ずんば見仏すべからず。遂に見仏を得れば三昧を成じたるなり。若し三昧を得ざれば見仏すべからず。故に三昧を得する証明は見仏にありと知るべし。喩へば人が目を患へば衆色を見ざるも、大医師が能く眼を療治するに金鍼を以てする如しと。

靈驗の種々なる方面

三昧發得して見仏するとは、基督教にては聖靈を感ずと云ひ、禪にては見性また大悟と云ひ、密家には悉地を得ると名づく。是等其名は異なれ共、要は宗教意識が全く基督教に所謂復活の状態に入りたる所にて、即ち活信仰と云ふ辺に於て同一なり。喩へば卵子が孵化して卵殻を出で雛子と為りしが如き心靈の状態を云ふ。吾等衆生は仏性を具すと雖も、孵化せし鶏とならざれば、靈の生命未だ顛動態に復活せざるべし。從來の煩惱我が死して靈我が復活することに於て、禪に之を大死一番と名づく、是れ三昧發得の状態なり、名は異にして実同じ。恰も人の心が闇黒態より光明態に転化せし処なり。其方面を異にするは感覺と感情と知力と意思と云ふ如く、三昧を得て仏の相好光明等を知見するは靈の感覺なり。仏の相好及び浄土の莊嚴は觀見せざるも、心が広き天地に出でたる如き氣持ちに成りて法悦に満され、感謝の情禁じ難き底に感じたるは、感情の方面に復活を感じたるものなり。また禪の見性の如く独朗天真が顕はれ、本地の風光新天地に逍遙するもあり。仏知見を開示して仏の正道に悟入すると云

ふ如きものもあり。超然たる大家に於ても澄々たる秋天に皎月さやかに照して一点の雲なき状態に入り、実に涼やかなる澄心、湛ゆれども而も、識神の愛に感ずるものあり。又暖かなる如来の慈悲に抱れ乍ら其感なきものあり。或は温かなる春日和氣の中に無上の慈愛を感じ乍ら、自性天真の空を知見すること能はざるものもあり。大靈界の至真と至善と至美との新天地に出で、相好光明の仏及衆宝莊嚴の浄土を見ながら、而も自性清浄の天は永しへに朗かなりと感ずるものあり。温かなる慈愛の中に法悦の妙味を味ひながら、而も無生の法忍を悟るあり。自性は十方世界を包めども中心に儼臨し給ふ靈的人格の威神と慈愛とを仰ぐもあり。真空に偏せず妙有に執せず、中道に在て円かに照す智慧の光と慈愛の熱とありて、真善微妙の靈天地に神を栖し遊ばすは、是れ大乘仏陀釈迦の三昧、又我宗祖の入神の処なりとす。冀くば識神を浄域に遊ばしむることを期せよ。

念仏三昧の実（成果の内容）

あみだ仏びつに染そむる心こころの色いろに出いでば秋あきの梢こずえの類たぐひならまし

弥陀みだに靈化れいくわしたる心相しんさう||我祖わがそ念仏ねんぶつ三昧さんまいに入りて年久としひまし、口くちに称となふる処ところは六字じゅうじの聖号しやうがう意こころに念ねんずる者ものは弥陀みだの本願ほんぐわん、念々ねんく如来にららいの心光しんくわうを被かむり、声々しやうくみだ弥陀みだの慈愛じあいに触ふれ、智慧ちゑの時雨しどれに逢あふ毎ごとに、真善微妙しんぜんみゆうの色いろを添そふ。黄染きいば益々ますます深ふかければ美化びくわの紅いよく弥々こまや濃なかに、弥陀みだに染そまりし功果こうくわは、即すなはち宗祖しゆその靈的人格れいてきじんかくの核かくを為なす。おもふに縱令たとへ権化こんげの大師だいしと雖いども、昔むかし黒谷くろみだにの報恩藏ほうおんざうに入りて聖教しやうけうに眼まなこを晒さらし、鑽究さんきゆうに意こころを集あつめし当時たうじの心象こころは、吾人ごじんに云いはしむれば、理性りせんの範圍はんゐに於おいて仏教ぶつけうを究きはめ、華嚴けごんを繙ひもとく曉あかつきは重々ちゆうく無尽むじんの教けう義ぎに心こころを注そぎ、法華ほつげを披ひらく日ひには実相じつさう十如じふじよの文句もんくに思おもひを潜ひそめ、般若はんにやを閱えつする時ときは一切さい皆空かいくうに意こころを留とどめ、涅槃ねはんを見る夕ゆふべには、常住じやうじやう仏性ぶつしやうの味あじをなむ。大師だいしの智慧ちゑ徒たつらに文字もんじの葛藤かつとうに捕とらはれて、貴重きちゆうなる精力せいりよくを徒費とどする如ごとき愚ぐを傲ならはざるは勿論もちろんなれども、然しかれ

ども未だ仏教を研究の材料として、靈性を復活するの資糧とはなし給はざりしなり。後に始めて反魂の靈藥を發見し、專修一行の念仏に歸し、本より天稟に豊富なる宗教的の資材に、加ふるに起行の激烈なる、寒夜に汗を流す功を積み給へり。然るに三昧の弥陀我に有り、我れ弥陀に在りて、いつしか靈化せし功果は円満なる人格の靈核となり、八面玲瓏として恰も教祖釈尊の「諸根悦予し姿色清淨にして光顔巍巍たり、明淨なる鏡の影が表裏に暢るが如し」とは、弥陀の靈光に淨化せし教祖釈尊を讚美したる阿難の語なれども、教祖を範として、弥陀に美化したる我宗祖に適用して妨げなからんと思ふ。教祖と云ひ宗祖と云ひ、自から弥陀に靈化したる人格を以て範を後昆に垂れ、一切をして弥陀の大慈悲の下に摂化を被らしむる聖意なればなり。

三昧の果は人格に結ぶ 宗教心、否念仏三昧の麗はしき花と靈き果とは人格の聖き枝に咲き、心靈に結び、口称の功果は自己の人格に具はる。謂ゆる究竟如虚空広大無辺際へんざいの淨土じやうどの莊嚴しやうごん、七宝しちほうの宮殿くうでん七重宝樹ちゆうほうじゆの花を有ゆる淨土じやうどの莊嚴しやうごんは、弥陀みだうの大人格だいじんかくの

心靈しんれいに開ひらきたる花はなと云いことを得う。六十万億まんおくの金色身こんじきしん、八万四千まんせんの相好さうがうも無量功德むりやうくどくの大だい人格じんかくに結むすびたる果こに外ほかならず。弥陀みだの大靈格だいらいかくを離はなれて依正二報えしやうほうの莊嚴じやうごん有あるべからず。宇宙うちうの大だいなる靈格れいかくに結むすびたる念仏三昧ねんぶつまいの種子しゆしは、釈尊しやくそんの人格じんかくに正覺しやうがくの花はなと開ひらき涅槃ねはんの果みを結むすびぬ。三世諸仏ぜしよぶつの正覺しやうがくと云いも、実じつに念弥陀三昧ねんみだまいの心こころに開ひらきたる花はななり。弥陀みだの大靈格だいらいかくに結むすびたる果實くわじつは、念仏三昧ねんぶつまいの種子しゆしとして十萬世界じゆせかいに播布はんぷさる。此この種子ぶつしが識し神ろに攬入らんにかすれば頓とんに無量むりやうの罪消つみきえて、頓とんて三昧まいの花はなを開ひらく。三昧まいの花開はなひらく時ときは大だいなる弥陀みだの靈れいに開ひらかれて、廣大無辺際くわうだいむへんさいの衆寶莊嚴じゆほうじやうごんの淨土じやうどを見みることを得えん。弥陀みだの心靈しんれいに開ひらきたる花はななれども、我われらが心こころの開ひらく処ところに頭あたまはれるとは実じつに不思議ふしぎと云いはざるべからず。茲こゝを導師だうしは「弥陀みだ仏國能所感ぶつこくのうしよかん、西方極樂難思議さいほうごくらくなんしぎ」と讚さんじ給たまふ。念仏ねんぶつの種子しゆしを心靈しんれいに受うけて最もつとも美うつくしき人格じんかくの花はな、奇くしき果みと熟じゆくしたるは我われが宗祖しゆそうの靈れい的人格じんかくなり。之これ念仏三昧ねんぶつまいより成熟せいじゆくしたる結果けつこなることを忘わするべからず。我われらは之これに倣ならひ之これに隨したがひ、自己じこの靈れい的人格じんかくを形成けいせいすべき天分てんぶんを負おふものなることを自覺じかくすべし。

人格の花と実 || 植物生活に於ても、若しは草にまれ小樹にまれ、成長期に達すれば花が咲き実を結ぶ。靈的人格に於ても之に比例すべき性を有するなり。道詠のうち初の選択名号は聖の種子にて、愛染の道詠は花が咲かんとする準備にて、念仏三昧の二首は正しく花が麗はしく開きたる姿にて、今は正しく三昧の実を結びたる姿なり。然るに生物進化の説にも適者生存と云ふ語あり。植物の種類は沢山有れ共、其土地に能く適当せる物は益々繁殖して成長し易く、其反対に不適當なるものは動もすれば其種族迄も失ふことあり。春の氣候を待て適地に種子を播下して、大に其植物が繁殖する如くに、我祖は時機を得て最も適当せる念仏の法種を播す。其流行の盛なる未曾有なりと云ふべし。就中、御自身の人格に咲ける靈花の美麗なる爛漫たる容色、醜郁たる香氣其光景は、あみだ仏と心を西にうつせみの神識が、大靈の粹なる弥陀に投合し形体は此処にあれ共心は咲匂ふ淨き御国の園に逍遙し、念仏三昧の花開く処に、淨土の莊嚴は宛然として現前す。是れ大師の人格の花と云ふべし。次に弥陀に染化したる

麗しい果皮の色最も美なる果味となり、之を喰ふ時は陶然として快樂極りなきを覚えん。加之、永恒不死の生命となるべき靈格の核を成熟す。是が我祖の人格に結びたる果実なり。斯の如く皮肉骨体共に完全なる靈的人格を形成する処の各部分を分類して各方面より説明を試みん。

清浄光に美化せる感覺

身体を組織せる皮肉骨髓、精神の感覺と感情と智力と意志とに比例して、弥陀に淨化したる靈的人格の内容実質を分解して見れば、感覺は皮膚に比例す。人の感覺を美化する如來の方は即ち清浄光なり。全体我等衆生は自性に清浄心は有すれども、前生よりの染汚とか、又遺伝とかの汚れを有し、又後天的にも眼耳鼻舌身が外の色声香味触法の、色を視声を聞き香を嗅ぎ舌に味ひ身に觸るゝなどより自然と我心を染汚せり。美食美味等の欲の爲には、衛生及道德上の害に爲ることをも顧みずして敢為し

色いろに荒すまみ酒さけに耽ふけり美味びみを嗜たしなみ飲いん食しょく度どなく、或あるは華ひくわ美びなる衣い服ふく其その他たけ化け粧しょう杯はいの為ために心こころを汚けがし、または其そのの奴ど隸れいと成なり、或あるは肉にく欲よくの為ために墮だ落らくの淵ふちに沈しづむ族たぐひも少すくなからず。感かん覺かく欲よくと云いふものは只ただ一時じの心こころを汚けがすのみならず、段だん々く昂かう進しんする結果けつ果くわは、病びやう的てきに陥おちいることあり。例たとへば喫きつ煙えんや飲いん酒しゆの如ごとく、すべて感かん覺かくの刺し戟げきに順なれるに随したがつて、度どを増まさざれば感かんぜず、漸ぜん々くに進すんで竟つひには習しゆ慣わんが病びやう的てきと為なるなり。古こ来らい豪かう傑てつと云いはるゝ人ひとも、蛾が眉び粉ふん黛たいの色しき魔まに捉とらはれ、酒しゆ煙えんの奴ど隸れいに陥おちれる輩はいの多おほくあるを耳みみにす。色しきと声しやうと香かうと味みと触そくとの五よく欲よくは、人ひとの心こころを染そめ汚けがするもの故ゆゑに五ご塵ちんと云いふ。又また人の徳とく義ぎ心しんや衛えい生せい思し想さうなどを賊そくなふ過くわ失しつあるより五ご賊そくとも云いふなり。

之これを自じ覺かくさせ而しかして五くわん官かんの感かん覺かくを清しやう淨じゆく美び化わする如にやらい来の力ちからを清しやう淨じゆく光くわうと名なづく。外ほかより習しゆ慣わん的に汚けが染せんせしのみならず、本ほん来らいの凡ぼん夫ぶの感かん覺かくは汚けがれたるものなり。之これを清きよめて美うつくしくするの如にやらい来の清しやう淨じゆく光くわうなり。

果くだもの物ものを以もつて云いはゞ、能よく成せい熟じゆくすれば外そと皮かはの赤あかとか黄きとか麗うるはしくなる如ごとく、宗しゆ祖その

人格の高潔なる、闇夜に光を放ちて書を読み、また頭光を放ちて月輪殿を感じしめし
 如く、清浄光が念仏者の六根に映現しては六根清浄となる。また大悟徹底せし心靈上
 に、八面玲瓏として身心皎潔なる無我を感じ、又美化したる心の靈感、天地新らし
 く靈日麗しきを覚ゆ。弥陀の清浄光に感ぜし心は、恰も日光が寶石に映ぜるが如く
 また心の花開きて快美に妙香醇郁として靈感極りなきを感じ、心耳には天楽和雅の妙
 音に爽快極なきを覚え、心には八功甘露の水に津々たる滋味を受くるなり。一度清浄
 光の中に融合せよ、実に八功德池に浴するが如く、調和冷煖にして自然に意に随がひ
 神を開き体を悦ばしめ心垢を蕩除し、清明激潔にして淨きこと形無きが如し。
 こは之れ靈界に逍遙する心の状態なり。淨化したる感覺は、身は娑婆に在り乍ら神
 は清き園に栖み遊ぶ。唯識には一水四見の喩あり。同じ水なれども、人には水と見え
 魚類は空気と感じ、餓鬼の業識には熱水身を焼くかと感じ、天人の清眼には美しき瑠
 璃地と見ゆと。実に人間が自分の業識にて天地万物を人間相應に感覺しつゝあり。若

し仏眼を以て見れば此処も清淨仏国土にして無比の莊嚴を觀ることを得ん。我等は宗祖の淨化せられたるを模範として一心念仏して、弥陀の光に淨化せられて六根の清淨光中に相應せんことを樂ふべし。

歡喜光に染みて歡喜に満たさるる感情

精神の肉は感情なり。また血を循らして人格の内容を豊富にし麗はしくするものは感情の美なり。全体人間本来の感情は、能く調はずして人格の核も性も、自我即ち自分勝手のものなり。唯己が肉の幸福や、又は我慾にて、名譽なり財産なり權利なりのそのみを渴望して、唯現在のみに汲々とし、自分さへ良ければの主義を取るなり。人生は肉の快樂を享受すべき舞台と想ひ、唯形の上の幸福のみに焦る。実は還て夫が不満不足を感じる原因となり、私慾の強き為に名譽や財産を飽くまで貪ぼり、為に不足と煩悶の種を蒔くなり。元來此世界は、斯る人々の欲望を満足せしむる為に發生せ

しに非ず。真実に人生の幸福を得て満足に生を送らんとせば、自分の浅薄な心を且らく捨て、人類を永遠に救済さるゝ慈悲の福音を聞くべし。世の光なる宗祖の化益に浴せよ。大師の円満なる人格は範を後世に垂れたり。大師が「我は是れ十悪の法然房愚痴の源空なり」と一身のすべてを献げて、大慈の懷に抱擁せられ、摂化せらるゝ外に道なしと、専ら本願の念仏を行じ給ひしかば、大悲の懷に摂められたる仏の卵は頓て孵化して、仏の真面目となりて顕はれたり。

感情の信仰には、如来の恩寵を仰いで微かなりとも光明に接すれば、従来の己が甚だ非屈なることを感ずべし。実に己は思しらずの罪人、無慚愧の動物なりと罪惡觀を昂むるに随つて、如来を頼む心も弥々強くなるべし。大光明を得ざれば解脱し難しと想ふ時は、益々煩悶の度を進めん。弥陀を欣慕するの情を深く起し「我は唯仏にいつかあふひ草」と、其至誠熱烈なる信念を即ち煥位とす。此暖みが心靈の孵化を被むる内因にして、恩寵を仰ぐ処に大なる慈悲の温熱に抱擁せらるべし。いよ／＼あみ

だ仏と神心を弥陀の靈中に投映して、其極に達せし時に、神秘融合不可思議を感じて靈の蕾は綻び、爛漫と麗はしく馥郁と芳ばしく、啐啄同時に皮殼我の中より聖き我が雛の如くに、嚙喰たる称名の声と共に生るゝなり。而してそれが大悲の憶の裡にして、いつも歡喜の日光は麗らかに照り亘り、歌ふ鳥の音、笑む花の色、何かは歡こびの種ならざる。歡喜の光に融合すれば神は常楽の園に安住する想ひ、如来の信受法樂をばむかしは遠き入日のそなたに望みしも、今は暁の寝ざめの床にも感ぜらる。一度び開きて永しへに咲匂ふ心の花をば、いつも如来と共に眺めつゝあるなり。未だ靈の花は散らざれども、人格に結びたる靈の果ははや熟しぬ。日々に味ふ処の甘美はこれぞ法悦とや名づけけん、甘くも酸くも種々なる無限の妙味は意のまにまに味はる、凭く美味に熟せし上は、必らず髓とも云ふべき核も成就せること疑ひなし。凭る美味を此世乍ら味ひつつ生活せらるるは、是全く宗祖の人格に結びたる種子の賜ものと想へば大師の恩を感ぜざるを得ざるべし。

智慧光に照されし知力

生理学上より云ふ脳髓神経の働きは精神系統なり。故に髓は知力と知るべし。是は如來の智慧光に依つて知見を与へらるゝ部分なれば、いかに皮膚も美しく肉も豊富に筋肉も健全なればとて、脳髓神経の部分が不完全なればゼロと云ふべし。人は天性の脳及び神経の発達、また理性としては世に賢明なる君子と仰がるゝも、靈性の知見が啓示されざる間は、宗教より見れば未だ盲目たるを免れず。理性の鋭利なる輩は己が靈性の盲目たるを自覚せず自負して己れ智ありと謂ひ、靈魂は滅とか不滅とか、人生の帰趣は甚麼に在りとか、斯の如きの種々の見解、即ち身見辺見邪見執見戒禁取見などに陥りて、彼等は未だ靈性開けず、唯理性を以て推理を下すが為に謬見を生ず。靈界の消息は理性を以て窺ふことを許さず。世に己が靈の眼なきを自覚せずして、仏身や仏土の存在を疑ふのみならず、還つてこの存在を認めず杯と主張せるものあり。実

に愍むべき徒なりと云ふべし。

爰に我祖は、曾ては一代の經教にも精通し、智慧第一の譽を荷ひしにも拘はらず、弥陀の前には「我は愚痴の法然房黑白をも弁へざる癡漢と選ぶ所なし唯念仏して弥陀を頼むより外なし」との偽りなき告白は、弥陀の容る処と為つて、いつか知見の眼を開き給ふ。あみだ仏と申すばかりをつとめて、浄土の莊嚴見るぞ嬉しき」とは正しく其証として信ずべし。

扱、仏知見開示とは、何れ靈界を知見することなるも、唯仏身仏土等を觀見するのみなるか、將た其他に悟入することありやとの問に答へて。知見開きて所觀の方面は幾干かある。先づ三種を挙げれば、一感覺的、二説話的、三理想的。初めの感覺的、知見とは仏の相好光明、又浄土の莊嚴を觀見する等、または答笛の声即ち天籟の音を聞く如き、或は種々の妙香芬烈として量りなきを感じ、又は舌根に於て世に比類なき妙味を感じ、または寒風膚を劈く嚴冬の折に、柔軟なる兜羅綿を以て身を覆はるゝ

を感ずるが如き、是等は感覺的知見なり。次に説話的とは、例を云はゞ善導大師入定して百余尺の仏身を見る。告て曰く「樹を伐らんには切に斧を下せ。縁なきには共に語ること勿れ。家に還らんには苦を辞すること莫れ」と、又「汝が師の道綽に三罪あり、宜しく懺悔せしめよ云云」の如きは、説話的にして、次に理想的とは禪の見性の如き本地の風光又は天地一体の如き、尚広くは三昧を得て諸の神通、智慧、総持を得る等なり。

隨の智者大師、法華三昧に入りて、靈山に於て釈尊法華説法の會座に列なるを觀見し後に旋陀羅尼を得て弁才無礙を得たりと。

基督教にて聖靈を感じ、また黙示を被むると云も、仏教のそれとは広狭ありと雖も同一なるを信ず。

仏教の諸の大乗經は、概して釈尊が三昧定に入りて、經驗されたる相狀の説明なりと云も或は然らん。由之觀此、大乘仏教は悉く弥陀の智慧光が釈尊の心に映

じて、仏境界の消息を説教されたりと云に帰すべし。此段に至つても古今の高僧中に
宗祖の如き造詣の深きは又有らじ、开は元享釈書等を披覽せば明らかなり。是れ宗祖
の髓なり。若し前の三昧発得して浄土の莊嚴を觀見するを以て心の華とせば、無生法
忍を得、また弥陀の相好等の觀見のみに非ず、宗祖の人格の核としては或は暗夜に身
より光を放ち、或は頭光を現じ、橋上地より一尺を隔てゝ歩行なざる如きは、慥に以
て靈格の余光に外ならずと云ふべし。

不断光に恵れて道德的に靈化せる意志

人格を形成する筋骨と為るものは、精神中の意志なり。精神生活の中心なる感情、
我が温かな豊富なる血や肉の如きものを以て生活しつゝあるはこれ筋骨の力なりと雖
も意志其ものが健全に緊張して気張らざれば生存の煩瑣に耐ふべからず。感情我も我
なれども、尚一層固き人格の柱と為る意志を鞏固にせざるべからず。意志は力にして

人格の外部に於ける働はこの作用なり。されば人間も精神の進化したる動物なれば動物性の我に活きんとする氣力を根本となす。然し同じ活きんとするには唯動物的に活きんと欲するのみにあらず。進んで理性の意志として活きんとすれば、常識を有し、人格を具備するを以て高等の生活と云ふべし。尚進んで靈我と永遠の生命を基礎として活きんと欲するに至りて、始めて完全なる人間生活と云ふべし。想ふに人の意の善と悪とに分るゝは、意志の方向が何れかに有るなり。肉慾や我慾を目的とし、我あるを知りて他人の迷惑を顧みざる如きは悪の作用なり。仏教には人格の核を為す所の意向を十界に分類して、迷と悟と善と悪とを本とし、十部の階級的に區別す。

人の意志の水は、滔々として不斷に持續して、我意の欲する方向に流れつゝ働く、若しは悪き方、若しは善き方、遂に永く持續する時は之が習慣となる。既に地獄の性格と固定せし神識は他より見れば恐ろしい悪業なれども本人は平氣にて敢行す。我々の意が地獄とも餓鬼とも、又は人間天上、進んでは菩薩の靈格とも為るは、喩へば果

物の実が甘きに酸味に各々の持前に熟する如く、人の意志の働きは自己の性格を形成しつゝあるなり。

前に演べたる如きは、世に賢人偉人と称せらるゝ方も、理性の域に位置を定めたる人は、偉人と云はるゝも、仏教より云はしむれば人天の範圍に道徳を説き人格を形成するに過ぎざるべし。

我日本国民に心靈界の光明を宣伝して、道俗を通じて、大慈光明に摂して靈の生命としてしらずく、聖き人格の核を為さしむる宗教を開かれしは、唯我祖のみなりとす。

一切を撰取して平等に淨化する光明は、喩へば太陽の光の如くに照しつゝあり。若し人此光明と自己の意志とを結合すれば、無限の靈力は、常に人の意志に流れて其意志を靈化する。然れ共如斯靈光は肉眼を以て発見する能はず。

衆生をして此光明に接触する方法は即ち光明名号なり。口に称へる如く意に

も憶念すれば、不断の靈光に感応して意志を靈化する。從來の罪惡我を脱して聖我と為らんには、不断の意志を要す。不断の靈光に浴し、日に新たに亦日々新たに、不断の改革不断の努力を要するなり。人間一日一夜に八億四千の念あり、念念の中の所作皆是三途の業なり」と。我等若し如来の不断光と離るれば、実に然り。無明妄動の起す所の業は、悉く三惡ならざるはなし。若し之を転じて弥陀の不断光を我意志に接続せば、弥陀の靈電我が意志に伝はりて、或は灯明と為り、或は温熱と為り、器械運轉の力と為り、我等は三業の所作をして、快活に勇氣を鼓舞して、聖意に叶ふ働きを為すことを得べし。

積尊が成道の 晝より臨終の夕に至る迄、不屈不撓不断の衆生濟度の努力は、弥陀不断光の人格現に外ならず。我祖の人格に結びたる核は、日本の釈迦として不断の活動三業の所作、悉く弥陀不断光の実現ならざるはなし。

ミオヤの全き如く、全き人格を以て一切を化す。抑も是れ弥陀に靈化したる人格に

あらざれば斯の如く全きを得んや。

宗祖の靈的人格の全きを以て弥陀の實在を証して余あり。喩へば太陽のエネルギーが、米を実らしむる能力ありや否やは、唯太陽の光のみを見て証明すること能はざれども、田地に稻種を播下して萌発せしめ、苗が成長して実を結び、米と為りしを見て太陽の力を被らざれば、いかに稲実を收穫することを得むやと思ふ。弥陀の光明が人の心靈を養成するに於ても又然り。衆生の心地に名号の仏種子を播下し、常に弥陀の慈光を被むらば、其收穫は各自の靈的人格として現はれん。宗祖を模範として、弥陀の光明能く人を復活するの力あることを証すべし。

尚各自々に結成したる人格を以て、靈の存在を証明せんことを、切に希望して止まざる処なり。

(三七八頁以下「宗祖の皮髓」より)

